

## 坪井誠太郎先生の追憶

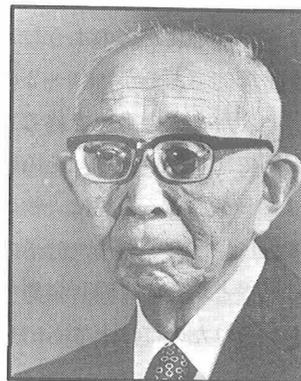
飯山敏道（地質学教授）

昭和61年9月22日、本学名誉教授坪井誠太郎先生がおなくなりになった。この報に接して、一時自分の耳を疑ってしまったのは私のみではないと思う。93歳の御高齢とはいえ、ついこの間まで坪井先生らしい端正なお姿と足どりで、時々教室に来ておられた。その折には何時も歯切れのいい口調で、明せきな御考察の数々をお話し下さった。何時しか、私共の頭には“不死鳥の坪井先生”というイメージが形成されていたのである。

先生の数々の御業績と御貢献については、東京大学広報で報じられている。こゝでは、御在官当時の先生と学生達という角度から先生を画きだし、先生を偲ぶこととする。

昭和23年、私達17人は理学部地質学科に入学した。“坪井先生は気難しく、厳格な方だぞ”と誰からともなく教えられた。それなりに覚悟して、必修の岩石学の講義に出る。たしかに、講義室にぬれた傘を持ちこんで、床に水が拡ったりすると、ひどく叱られるという、先生の気難しさはあった。しかし、講義には、当時、ラジオの人気番組の“話の泉”の話も出てくれば、外国の大学街の様子や有名な学者のエピソードも語られる。結構息抜きのできる科目であった。それにもまして、講義が明解で、お話を聞き乍ら、こっちが考える余裕が充分にあるものであったことが嬉しかった。数式が出て来て閉口だと言う者もあったが、それも覚える数式ではなく、理解するための数式であり、楽しいものであった。

先生は“岩石学、鉱物学は観察から出発する学問である。岩石の産状の観察の次には、標本を鏡下で観察することになる。この検鏡という基本手



段を十分に教えよう。それに続いて造岩鉱物の主なものの性質、特に物理化学的な性質について話せば充分である。岩石に関する研究基礎を与えることに徹底しよう”と考えておられたようである。一年間続く講義と実習の前半は結晶光学であった。それも、結晶物質の光学的性質が偏光顕微鏡下でどのように現われるかについて焦点がしばられていた。演習は結晶光学の面倒な計算を対数表と鉛筆でやらねばならず、非常に閉口した。しかし、そのお陰で、検鏡している時に、今この鉱物の結晶をどの方向からどのような性質について見ているかと言うことについての認識が常に頭の中にあるようになったのも事実である。第二学期は、主要造岩鉱物の各論と実習であった。造岩鉱物に関する教育は、坪井先生が、東大の岩石学をして、“最も東大らしい岩石学”に育てられた源泉であった。しかし、決して多くの鉱物について多くの事実を羅列されるのではなく、ごく限られた鉱物について物理化学的性質を中心に話されるものであった。造岩鉱物にこれだけの努力が注がれている大学は、世界でも数少く、恐らく英国のケンブ

リッジ大学とその系列と東大だけであろう。二大  
学とも、岩石学では、多大の貢献をした研究者を  
輩出している。岩石学と名づけられた先生の講義  
で実際の岩石についての話があったのは、わずか  
3回だけであったが、それで充分研究遂行の基礎  
が与えられていた。

中期生になると、選択科目で、岩漿論および変  
成論という講義が坪井先生によって行はれていた。  
これも、多くの複雑なことを話されるものではなく、  
岩石、マグマの進化をどのような角度から考  
究すれば最も合理的であるか、2～3の例を丁寧  
に説明され、わずか8回の講義で終るものであ  
った。“地下深所で起った変化を、その産物である  
岩石を調べて考察を進める過程は、物理現象、化  
学現象を見て目に見えない原子、分子の構造や性  
質を推定する過程と本質的に同じ姿勢である。”と  
講義をしめくくられたのは、とても印象的であ  
った。

先生は“変化を目で追うことができない岩石の  
成因の研究では、観察事実の解釈の論理にあいま  
いさがあるてはならない”と常に思われ、御自分  
の行動、発言もこの信条に従っておられた。

終戦後間もない頃の大学に対する占領軍の干渉  
も少なくなかった当時である。血気盛りの我々は、  
やゝもすると、学生ストライキだ、学生大会だと  
騒ごうとした。私達はこの騒ぎで忙しいから、試  
験を延期して頂くことを考えた。この申し出をし  
に、総勢15人が、アポイントメントもとらず、夕  
方お宅に押しかけた。我々を招じいれられた先生  
は皆の話をきかれた後、“今回の占領軍の干渉は  
私達教官も心配して、大学の自由を守るための対  
応策を考えている。かと言って騒動を起して解決  
されるものではない。まだ最終行動に出る時では  
ない。そもそも、こう言う最後手段に訴える時  
には、一命を賭す決意が必要だ。そこまでは切迫  
していない。とに角試験は予定通りやりましょ  
うと10時すぎまで押し問答、結局私達は試験を受け  
る約束をした。先生の方に道理があり、冷静に話  
される先生のかもし出される直剣な雰囲気一同

強い感銘を受けて帰途についたのであった。

中期の夏の地質調査実習のフィールドで私達が  
起した悶着も忘れられない。地質学科では中期生  
の時40日間、3～4人の班にクラスが分け、1/  
50,000地形図の1/4位の地域を調査する。私達  
の時の実習は坪井先生が指導された。発表された  
フィールドは、長野県の鹿塩村から北は茅野の南  
にわたる地域であった。分布する岩石はどの班も、  
変成岩と花崗岩が主で、堆積岩の分布は極めて少  
い。勇気?のある奴が先生に“地質調査の実習地  
としては不適當である”と申し出た。どんなに立  
腹されるかと思ったのだが拍子抜けがした。先生  
のお答えは、“私は地質調査実習の担当の度毎に  
中央構造線沿いに九州から始めて、この構造線の  
北端まで来ました。私の最後の指導担当だから、  
こゝにします。どんな岩石が分布していようと、  
地質調査の勉強はできます”と言われ、返す言葉  
もなく、このフィールドを調査することに同意し  
たのであった。先生は一班に2日位来られ、私達  
と一緒に歩いて下さった。先生が来られる前には  
無味乾燥、あまり気のりのしないフィールドであ  
ったが、先生が私達の班に下さった問題とそれ  
に対するヒントのお陰でその後の炎天下の調査が楽  
しいものとなったものなつかしい記憶である。

私達のクラスには急進派も多く、先生に種々非  
常識なことも言ったが、何時の間にか“先生は気  
難しい方だが、理屈が通り、こっちに誠意があれ  
ば解って頂ける”ということが皆の心に芽生えて  
いた。又“ひどく叱られることはあっても、後々  
までそのことのたたりを受けることはない”と言  
うことも解って来た。その証拠には、後期の卒業  
研究で、先生の指導下に入ることを決めた5人  
の中に、騒ぎの度に首謀者となる急進派の2人が  
いたことでも肯げよう。

先生が岩石学を専攻する教官、学生に御自分の  
研究結果なり、文献で読まれた事なり、学問の紹  
介をされる時、先生はそのことが非常に楽しくて  
たまらないと言う気持を満面にたたえられる。“学  
問をすることは、楽しいことなのだ。たとえ肉体

的な苦痛を伴っても、新しいことを知ることは楽しい。学問がそういう姿になるためには、自由であることが肝要だ”と口ぐせのように言われる。“自由であるためには、慣習的に言われ、皆が真理と思っていることにとらわれてはならない。”と言う訳で、一弁したことから議論が始り、4時に始ったゼミが9時になっても終りそうもなくなるのが時々あった。数学や物理学とは異り、常に黒か白か判定がつかない場合に対して、ある規範を設けて、他方を消去し、一方をとる態度に対する坪井先生の抵抗はそれ程強烈であった。

坪井先生の下に暮すこと4年で、先生は御退官になり、私も東大を出てやがて渡欧した。その新しい環境での生活の最初の日から、異和感を感じることなく、19年の歳月を研究で過ごすことができたのは、欧州の研究者社会の根底に、坪井先生が日常言っておられた事が綿々と流れていることによるような気がしてならない。先生が欧米に滞在され、いくつかの有名な研究を発表されたのは、わずか3年という短期間であった。その間に、このような信念を持つようになられたことは考えられない。それとも、大正末期の欧州の科学者達は、

坪井先生に感化を与える程、強固で明解な哲学の持ち主であったのだろうか。私には、先生が渡航される前から強く考えておられ、たまさか、先生が行かれた英国の学問社会の雰囲気、先生のお考えと一致していて、意を強くして帰国されたように思えてならない。

晩年の先生は、この信条が更に大らかに発揚され、種々なことに興味を持たれ、鋭く考えられては、私共の所へ来ては話して下さった。

東大理学部地質学科を卒業した人達が、日本だけではなく世界の学界、産業界に残した貢献は大きい。これらの人々の仕事が、岩石学であれ、他の地質学分野のもとであれ、多かれ、少かれ、坪井的なものを認めて、先生の影響力の大きかったことを改めて感ずる。それが時には、論理の綿密な整合性であり、時には、建前と言うことをめきにした本音に基く行動であることもある。

私達は、先生の崇高な人格と、すぐれた学問とその理念の影響を受けた幸福に感謝する。またこのよい影響に培われた地質学教室の伝統が今後も引きつがれて、一層多くの実りを結ぶようにも希って止まない。